

- Nineteenth-Century France*, Univ. of California Press.
- Greenslade, William 1994 *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940*, Cambridge Univ. Press.
- Halberstam, Judith. 1995 *Skin Shows: Gothic Horror and the Technology of Monsters*, Duke Univ. Press.
- Harter, Deborah H. 1996 *Bodies in Pieces: Fantastic Narrative and the Poetics of the Fragment*, Stanford Univ. Press.
- Hurley, Kelly. 1996 *The Gothic Body: Sexuality, Materialism, and Degeneration at the fin de siecle*, Cambridge Univ. Press.
- Nordau, Max. 1895 *Degeneration*
- Norris, Margot. 1985 *Beast of the Modern Imagination: Darwin, Nietzsche, Kafka, Ernst, & Lawrence*, Johns Hopkins Univ. Press.
- 太田省一 1997「公衆と退廃」、和洋女子大学紀要（文系編）第37集
- Pick, Daniel, 1989 *Faces of Degeneration: A European Disorder, c.1848-c.1918*, Cambridge Univ. Press.
- Richards, Thomas. 1993 *The Imperial Archive: Knowledge and the Fantasy of Empire*, Verso.
- Wells, H.G. 1891 "Zoological Retrogression." *Gentleman's Magazine* 271: 246-253.
- 1895 *The Time Machine*. =1991 橋本槇矩訳【タイム・マシン】、岩波文庫
- 1896 *The Island of Dr. Moreau*. =1996 中村融訳【モロー博士の島】、創元SF文庫
- 1897 *The Invisible Man*. =1992 橋本槇矩訳【透明人間】、岩波文庫
- 1898 *The War of the Worlds*. =1969 井上勇訳【宇宙戦争】、創元SF文庫
- 1909 *Tono-Bungay*. =1953 中西信太郎訳【トーン・バンゲイ】、岩波文庫
- （本学専任講師）

ただければ幸いである。

- (4) ダーウィニズムの言説が怪物の表象を生む機制については、Norris [1985] を参照。
- (5) マッドサイエンティストの系譜についてはBaldick [1987=1996] 第7章を参照。
- (6) 『宇宙戦争』(1898)の火星人は、知性の発達した存在であるにもかかわらず、地球人を食料にする。そこにもまた進化の逆説が描かれているとってよいかもしれない。
- (7) 同様の指摘についてはKelly [1996: 85-87] を参照。
- (8) 「学習する獣人」のモチーフは、フランケンシュタインからハイド氏などに至るまでしばしばゴシック小説のなかにみられるものである。
- (9) この「一度きりの大失敗」について、Kelly [1996: 108-109] ではモンゴメリーの同性愛という観点から考察を行っている。冒頭の引用にあるように、同性愛は、当時の言説において「退廃」の徴候の一つだった。
- (10) 最後に宿屋の主人が透明人間の残した解読不能のノートに見入る場面について、読む行為の失効を物語っているという解釈が可能だろう。
- (11) ここでG. ル・ボンの『群集心理』の公刊がほぼ同時期の1895年であることを思い起こすのも無駄ではないだろう。
- (12) やや時期はずれるが、『トーノ・バンゲイ』(1909)に示されるエントロピー的社会観は、また異なる形で集合的表象の力に迫ったもののようにみえる。Richards [1993] 参照。

参考文献

- Arata, Stephen. 1996a *Fictions of Loss in the Victorian Fin De Siecle: Identity and Empire*, Cambridge Univ. Press.
- 1996b “Strange Cases, Common Fates: Degeneration and the Pleasure of Professional Reading.” in R. Newman (ed.) *Centuries’ Ends, Narrative Means*, Stanford Univ. Press.
- Baldick, Chris. *In Frankenstein’s Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-Century Writing*, Oxford Univ. Press. =1996 谷内田浩正他訳『フランケンシュタインの影の下に』、国書刊行会
- Beer, Gillian. 1983 *Darwin’s Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*, Routledge & Kegan Paul.
- Darwin, Charles. 1859 *The Origin of Species*. =1990 八杉龍一訳『種の起原』、岩波文庫
- Dowbiggin, Ian. 1991 *Inheriting Madness: Professionalization and Psychic Knowledge in*

かもしれないのである。

【6】結びに代えて

ここまで私たちは、「退廃」の言説がフィクションの記述装置と交叉するとき、そこに形成される典型的な空間を、H.G. ウェルズの作品のなかに発見しようとしてきた。この小論をひとまず終えるにあたって、ここでみてきた「退廃」の空間についてやや異なる視角から補足しておこう。

『タイム・マシン』や『モロー博士の島』と並ぶ、ウェルズの同時期のSF小説の代表作として挙げられるのは、言うまでもなく『透明人間』(1897)である。ここにもまた他の二作と同様に、科学者が中心人物となって登場する。だがまず目に付く相違は、科学者自身がここでは実験の対象になるという点である。透明になるのは科学者である専門家自らである。この専門家の身体の透明化は何を意味するのだろうか？

それは一つには、専門家の視線の徹底化である。この小説の後半で現れる恐怖政治のパロディのようなモチーフは、透明になった専門家の視線の遍在を前提にしている。だがそれはまさにパロディであって、成功はしない。透明人間は、逆に町の人々に追いかけられ袋叩きになり、挙げ句の果てに殺されてしまう。つまり透明人間たる専門家は、共同体によって排除されるのである。そのような共同体は、もはや読者公衆ではない⁽¹⁰⁾。それは恐怖の衝動に突き動かされた群衆である⁽¹¹⁾。

この『透明人間』には、ダーウィニズムとの関連は皆無といってよいほど希薄である。その意味で、ここでたどってきた「退廃」の言説に直接つながるものではない。だが専門家の存在を無効にしてしまう群衆の表象は、「退廃」の空間に潜在するある力動を物語っている。それは、個の身体に定位する「退廃」の言説にとっては例外的な事態ながらも、その言説の実定性の成立にとっては不可欠な個の解体への力をあらわにする。言い換えれば、群衆という集合的表象は、「退廃」の言説に内在する不安の断面を露呈させるのである⁽¹²⁾。従って、ウェルズのここで取り上げた三編のSF小説を相互に関連させてみることは、19世紀西洋の言説空間のダイナミズムの一端を知る上で意義深い作業であるだろう。

注

- (1) 「退廃」という記号の多様さについては、Pick [1989] の議論が最も参考になる。
- (2) フランスの「退廃」研究としてDowbiggin [1991] を参照。
- (3) 読者公衆と「退廃」の問題については、拙稿 [1997] で論じたことがある。参照してい

ちの獣性を刺激したからであるようにみえる。退化しつつある獣人のなかに入っていこうとするモンゴメリーの行動が、彼がいくら「退廃」した存在であるとはいえまだ人間であるがゆえに、結局は無理なものだったということのようにみえる。

しかしもう一方で逆に、このモンゴメリーの運命については、彼だけが「退廃」という記号の根本的な曖昧さから逸脱し、退化に近づきすぎたからだという見方もできる。つまり問題は、獣人の共同体が、実は人間の共同体と重なり合うところにあるのだ。モンゴメリーは、獣人の共同体が人間の共同体と同質であることに気づけなかったがために、再び排除されるのである。そのことは、島から脱出し、モンゴメリーが逐われたロンドンに戻ったブレンディックの経験が示している。

ブレンディックはようやく島から逃げ出すが、戻った人間の共同体になじむことができない。「不思議なことに、人間社会へもどってみると、期待した信頼や共感のかわりに、島にいるあいだに経験した不安と恐怖が大きくなって待っていた。」(Wells [1896=1996:197]) 彼には出会う人間がすべて獣人に見えてしまう。性別、階層、年齢、教養といったものにまったく関係なく、あらゆる人々が「外見だけ人間に改造された動物」のように思われてくる。そして彼はそのような想念に耐えられなくなり、都市の喧噪から離れて、人から離れた田園で一人暮らしを始めるのである。

だが彼は、ただ一人冷静な人間というわけではない。「かくいうわたしにしても、理性をそなえた生きものではなく、脳におかしな障害をかかえた動物でしかない。」(Wells [1896=1996:199]) つまりここでブレンディックは、自らが獣人であることをどこかで意識している半専門家として提示されている。振り返ってみると、島においても彼は、獣人の共同体に内在しつつ、それでも一線を画そうとする行為を反復していた。彼は、獣人のなかに入っているときも柵を立てるなどして身を護ろうとする。それは、自他のなかの獣性を発見しつつ、そこから距離をとろうとする同型の行為である。しかもその防衛の試みは、最終的に挫折せざるを得ない。結局帰還したブレンディックを待ちかまえているのは、嫌悪の波及を防ごうとするが、専門家を失ったがゆえに無力な半専門家の不安なのである。

従って、ブレンディックがいくら都市の「退廃」から逃れ、自然のなかの生活に安らぎを求めようとしても、根本的に「退廃」の磁場に巻き込まれないでいることはできない。彼の一人暮らしは書物に囲まれ、実験をして日々を過ごすというものである。つまり彼は、半専門家としての自らの存在を放棄することはしない。だがそれは、自らのなかの獣性を強く感じ取ってしまった半専門家である。彼は、「広漠たる永遠の物理法則」に人間の希望を見出そうとする。だがその正体は、『タイム・マシン』の最後に語られたあの「退廃」の法則である

ところでここでも『タイム・マシン』と同様に、一つの勘違いが起こる。時間旅行家は、約80万年後の世界の現状について解釈を当初誤っていた。それに対し、船が遭難した後博士の助手モンゴメリーに救われ、島にやってきたブレンディックは、博士の実験をかいま見て、人間の生体解剖が行われていると勘違いする。だが時間旅行家は、自分でほぼ確信を持てるほどの解釈に修正していくのに対し、ブレンディックはそうはいかない。それは、彼が専門家ではないからである。

ただし彼は、生物学や生理学について全く無知ではない。従って彼は、博士の実験の真相を知った後、専門家である博士と苦痛をめぐる議論を交わすことになる。だがそこでの議論は、決して対等なやりとりにはならない。彼は博士の理論に対して有効な反論もできず、しかし完全には納得しないまま議論を終えることになる。その直接の原因は、彼の学識が、あくまで暇をみつけてという程度のものであるというところからきている。しかしここで重要なのは、「退廃」のフィクションの空間において、半専門家が、物語の核心に内在的に組み込まれているという点にある。その物語的必然によって、モロー博士は、いったんは神のように獣人たちの上に君臨するが、実験途中の獣人の手によって殺されることになるのである。それは、政治的寓話のようでもあるが、もう一方で、単に観察するだけでなく、身体そのものに介入する専門家の存在が排除されるという事態である。

では半専門家は、このときどういう位置にあると言えるのだろうか？

(2) 二人の半専門家

ここで注目しなければならないのは、この小説には二人の半専門家が登場するということである。小説前半の船内での会話が明らかにするのは、ブレンディックだけでなく、モンゴメリーもまた半専門家だということである。彼はかつてロンドン大学のカレッジで生物学を専攻していたと話す。だが彼は、放蕩の末一度きりの大失敗を犯したためにロンドンを去り、やがてモロー博士の助手になる⁽⁹⁾。そして今や彼は、アルコールなしではいられなくなっている。

ここでモンゴメリーは、「退廃」に否応なく向かっていく存在として描かれている。彼は、「退廃」への誘惑にかられ、その結果人間の共同体から排除される。そうした過去の経験から彼の人間嫌いは強まり、獣人への親近感すら示すようになる。それゆえモロー博士が亡くなり、ブレンディックが島からの脱出を訴えるときも、彼はむしろすすんで島にとどまろうとするのである。そしてブレンディックが止めるのも聞かず、獣人たちと酒盛りを始めてしまう。それはモンゴメリーにとっては、獣人との連帯感を表明する儀式である。だが彼は、酒を与えた獣人たちによって逆に殺されてしまう。それは単純にみれば、アルコールが獣人た

剰な強調となって現れるだろう。エピローグで彼が再び時間旅行に向かったまま戻ってこないのは、自らの理論を立証しようとする専門家としての立場をことさら強調する行為のようにみえる。だが彼がそこまでして立証しようとするのは、結局“退化の絶対性”である。「彼に言わせれば、人類の進歩などはたいしたものではなかった。文明の増大は愚かさの増大にすぎず、やがて反動的に人類を破滅させるだろうと彼は言うのだ。」だがそれに対し「私」は、そのことを知りつつも、「そうでないふりをして生きて行くしかない」と考える。(Wells [1895=1991: 120-121]) それはまさに、完全な退化に至る以前の「退廃」を受け入れ、そこにとどまろうとする姿に他ならない。そして『モロー博士の島』においては、そのような半専門家が専門家に代わって言説空間の中心になるのである。

【5】進化と退化の共存：『モロー博士の島』

(1) 起源の重層化

『モロー博士の島』では、獣人の身体の断片性がことさら強調される。それは、獣人の身体がさまざまな動物のつぎはぎであるという形で示される。モロー博士は、動物を人間に近いものに改造するために、身体各部分についてさまざまな試行錯誤を繰り返す。そこに進化論的な観点を付け加えれば、一つの身体の中に、進化段階の異なる動物の諸部分が層状に重ね合わされるのである。いわば獣人は複数の起源からなる身体をもつ存在である。それゆえ全体として、獣人はきわめて奇異な印象を与えるようになる。

そしてまた、モロー博士の実験はまだ試行錯誤の段階であり、獣人が人間の段階に到達することはない。一瞬そうだったようにみえても、時間の経過とともに獣人は、動物的な側面を再びあらわにし始めるのである。だがそれは、モーロックのように全面的な退化として現れるものではなく、局部的に起こる退化である。ここでの獣人の身体には、進化した（より人間に近い）部分と退化した（より動物的な）部分とが常に共存している。

だがさらに興味深いのは、獣人が、退化していくだけではないということである。獣人は、学習する動物でもある⁽⁸⁾。言語を習得し、マナーを身につける。そして実験の失敗作として島に離された獣人たちは、自然発生的に共同体をつくり、ともに生活を営むのである。彼らの学習がモロー博士の催眠術によるものであれ、またその共同体が博士を神のように崇めることによって統制されているとはいえ、獣人たちが自律的に行動する可能性を持つ者になっていることは間違いない。つまり、獣人の身体において、進化と退化は共存するだけでなく、常に進化の階梯の途中でせめぎ合っているのである。それが、この小説における“退化に近い何か”としての「退廃」が形づくる世界である。

時間旅行家は、観察者として未来世界に対して終始距離を置こうとしているように見える。それは、階級的に彼自身に近いはずのエロイに対してもそうであるし、むしろモーロックに対しては嫌悪感を抱き、戦おうとする。その意味で彼は、自分の外在性を確保することに懸命のようでもある。

だがその距離感が崩れそうになる場面もある。例えば、ウィーナとの感情的な交流はそうだろう。しかしより微妙だがより重要な例として、私たちは、時間旅行家のモーロックに対する嫌悪の質を考えてみなければならない。

井戸から地下世界に降りていき、モーロックに遭遇する場面で、時間旅行家が思わず感じる嫌悪は、モーロックの身体の断片性によるところが大きい。それは、暗闇のなかで顔に触れてくる柔らかい手の感触であり、深海魚のように光を発する眼である。そしてそれらは、上にふれた食料である肉の血が引き起こす吐き気を催させるような臭いにつながっていく。(Wells [1895=1991: 72-75]) そこではまさに、モーロックに対する反発が徹底して強調されているように思われる。

しかしながらもう一方で、時間旅行家は、モーロックと微妙に共鳴している。その基盤にあるのは、モーロックの「白さ」である。それは、彼らが元来は時間旅行家と同種の身体を持ち主であることを示唆している。そこから反転すれば、時間旅行家もまた獣人になりうる存在である。そのことは、時間旅行家が帰還した直後、肉への食欲を強く示すところにも反映されている⁽⁷⁾。

ただしそれは反面では、時間旅行家が外在的な観察者でしかないことを物語っている。時間旅行家とモーロックの通底性が浮上するようなとき、そこには逸脱的な事態が起こらなければならないだろうが、時間旅行家の食欲は、未来世界とは別世界の慣習にかなった欲求なのである。その意味で、時間旅行家の観察者としての距離感は決定的に揺らぐことはない。

そのことは、話の聞き手との関係にも重なってくるだろう。この小説全体の記録者であり語り手でもある、聞き手の代表者の「私」は、実は素性に明瞭さを欠く人物である。時間旅行家のもとをよく訪れる友人であることは語られるが、他の聞き手のように医者といった専門家でもないし、名前が明かされることもない。だが彼は、時間旅行家の専門的な話題を理解する能力は備えているようだ。要するに彼は、「半専門家」の典型としてここに登場を要請されているように見える。ただここでの半専門家は、専門家の視線の崩壊を通じて獣人との通底性を知らされることにはならない。

結局、専門家としての時間旅行家は、「退廃」した存在であることを示唆される一方で、外在的な立場を保とうとする存在である。そしてそのような彼の位置の曖昧さは、距離感の過

ロックは、資本家階級と労働者階級の関係にある。そして両者の間にある支配—被支配の関係がどんどん強化されていった結果、資本家階級は、自らの生活の糧の生産をすべて労働者階級に行わせるようになった。それがエロイとモーロックの関係である。

ところが、その解釈もまた反駁されることになる。地上と地下をつなぐ通路である井戸を降ってモーロックの世界に入り込んだ時間旅行家は、そこで目撃した事実をきっかけに、モーロックの食料が実はエロイだということを知る。つまりカニバリズムというきわめて衝撃的な形で、時間旅行家は、実際の支配者はモーロックの方だということを悟る。そこでは、19世紀の階層関係が固定され、ましてや増幅されるのではなく、むしろ逆転していたのである。

このように『タイム・マシン』において、科学者である時間旅行家の解釈は変化していき、結局カニバリズムの発見という衝撃的な結末を迎える⁽⁶⁾。しかしながら、この解釈の図式そのものは、ウェルズが個人で作り上げたものではなく、すでに触れた優生学の言説から借り受けてきたものである。当時この言説は、やはり資本家階級（中産階級）と労働者階級の関係に同様の図式を当てはめた。滅び行く存在であるはずの労働者階級は、福祉の充実によって適応能力を増し、さらには中産階級を脅かしつつある。その証拠として当時は、労働者の出生率の相対的高さが持ち出された。

従って、この小説のなかで繰り広げられる解釈は、大枠として優生学的図式に従ったものであり、それほど目新しいものというわけではない。だがここで興味深いのは、文明を全面的に動かしていく退化の力が、ひたすら放置されていることである。つまり優生学の言説ならば、過度の進化＝進歩が退化を生むという逆説をもとに、現状を否定し、何らかの社会的介入に話をすすめようとするところだが、ここでは起源は逆転し、退化はとどめようもなく前進するものなのである。敢えて言えば、退化は未来の事実として肯定されているようにすらみえる。

そのことが強調されているのは、エロイとモーロックの世界からようやく脱出した時間旅行家が、すぐにはもとの世界に還らず、さらに未来へと向かうことである。向かった先の世界は、すでに人類も絶滅し、なにやら気味の悪い生物だけがいる冷え冷えとした荒涼たるところである。だが彼は、そこで襲ってくる苦痛に耐えながら、さらに未来へと向かうのである。そこに示されているのは、文明が進化を阻害するということへの規範的な反応ではなく、「進化は退化」であるという逆説を徹底的に見届けようという観察者の姿勢である。ただしそれが単なる文明批評の域に収まらないのは、そのような観察者＝専門家もまた、先ほど述べたように言説の不安に関与する存在だからである。

(2) 専門家の不安

基本的には専門家が述べることを信用しようとする。だが他方でそれは、獣人の波及させる「退廃」の力を専門家の介在によって防ごうとすることでもある。だからひとたび専門家の解説（介入）する視線が崩壊しするとき、半専門家は、嫌悪のような身体反応を回避する直接の手だてを失ってしまう。そしてそのとき、獣人と読者の連続性、ひいては「退廃」のフィクションが描く言説空間そのものの不安定さが露呈するのである。

しかしながらその不安定さは、「退廃」の言説にとって常態化したものでもある。つまり当事者が「退廃」の記号を経験するという水準からみれば、それはゴシック小説がそうであるように、予め想定された事態である。従って、専門家は、ダーウィニズムの図式に従った退化に関わるものなのだが、半専門家たる読者の「退廃」のリアリティが浮かび上がろうとすると、必然的にその存在を危うくするものとして組み込まれている。

では次に、ウェルズの小説をもとに、このような連関に基づく「退廃」の言説空間をみてみよう。特に以下では、先にふれた「退廃」の二つの物語形式にそれぞれ対応する作品として、『タイム・マシン』（1895）と『モロー博士の島』（1896）を対比させながら考察してみようと思う。

【4】進化の逆説としての退化：『タイム・マシン』

（1）起源の逆転

ある意味で『タイム・マシン』は、非常にわかりやすい図式性に基づいている。タイムマシンの発明者でもある時間旅行家が約80万年後の世界に下す解釈は、19世紀後半の西洋において、進化＝進歩の図式に退化＝退廃の観念が入り込んでいく様をなぞり直しているかのようである。

時間旅行家は、優雅で穏和なエロイたちとまず出会う。そこで彼は、自分が進歩の頂点に達した世界にいるのだと考える。エロイたちは知性の程度も劣り、身の回りの出来事にも無関心なように見える。だがそれは、進歩の過程が頂点に達し、人類の末裔たるエロイが完全に環境に適応した結果、進歩を促す動因がなくなってしまったからである。時間旅行家は、そうした状況に何となく不満を感じながらも、性質の優しいエロイに囲まれることにそれなりの満足も得る。そしてある出来事をきっかけに、そのような優しさの象徴であるウィーナという女性と行動をともにするようになる。

だがそのような牧歌的な平和も、獣人モーロックの存在が判明するにいたって崩れることになる。地下世界において生産活動を営むモーロックとエロイという対照的な二つの「人種」を発見し、時間旅行家はそこに19世紀ロンドンの階級分化の行く末を読み込む。エロイとモー

は嫌悪は、どのような形で両者の身体を結びつけるのだろうか？

そこで重要になるのが、獣人と読者の間に介在するものとしての専門家の存在である。「退廃」のフィクションにおいて、獣人と読者は直接つながるという形にはなっていない。ここでは、専門家による解説（あるいは介入）という中間の行程が存在することによって、両者の関係にねじれが生じるのである。すでに触れたノルダウは、『退廃』のなかで読者公衆が本来芸術作品から受け取らなければならない共感の作用が、作品そのものの病理性によって損なわれていると主張する。しかしながら、ここで私たちが問い直してみたいのは、その共感のねじれそのもののなかにノルダウという専門家の視線が組み込まれてはいないかということである。それはノルダウが提示する世紀末の芸術の仰々しさやおどろおどろしさをそのままノルダウの視線の効果としてみようということである。ここで専門家というのは、テキストとしての身体に一次的に接し、そこに表現されているさまざまな記号（徴候）を解説する権限を認められた者である。そのような存在が「退廃」の言説において対象と読者の間に入り込んでいるとき、共感作用は常にすでに屈折したものとしてしか現れない。だがあくまで専門家は、それが実は、自らが一役買っている言説空間の形であることは否定する。つまりある意味で、専門家とは、自分がそのなかに存在する空間を無関与なものとして提示しようとする存在である。

しかし他方で、フィクションの空間のなかに登場するとき、専門家は、読者と同様にあからさまに嫌悪する身体となる。それは、ノルダウが自らの身体性を否認するようにしていたのと対照的である。周知のようにウェルズのSF小説においては、科学者が主要人物でしばしば登場する。なかにはモロー博士のようないわゆるマッドサイエンティストもいる⁽⁵⁾。しかしながらウェルズの小説に登場するのは、そのような明白な狂気を帯びた者ばかりではない。専門家の典型として描かれる科学者もまた、後に述べるように、視線が保つべき距離感を失い、思わず嫌悪という身体反応を起こしてしまう。そのとき獣人と読者が連続的な「退廃」した存在であることが明らかになり、またモロー博士のような存在の新しい意味合いもみえてくるだろう。

またこの「退廃」のフィクションの空間において興味深いのは、専門家を取り巻く曖昧な存在が重要な役回りを演じるということである。それは、時には専門家の理論や実践に対して疑問を向けたりする。彼らは専門教育を受けた読者公衆として、専門知識についていくことができる。だが彼らはあくまで「半専門家」である。ここで半専門家というのは、専門的課題に対して理解力を持つが、それに対する一義的な解答を自力で与えることのできない（あるいはそうしようとしない）存在である。それは、専門家を介して対象に接近するしかなく、

ているということである。（Harter [1996:1-4]）

このハーターの議論は、ダーウィニズムやウェルズを素材としたものではない。だが、ここの私たちの議論にとってきわめて示唆的である。幻想的なものの領域は、実はきわめて物質的なものの領域であり、そのような領域に関与する言説の実定的な台座は断片化する身体であるとするこの見解をここまでの議論に接続してみよう。屈折したダーウィニズム、すなわち「退廃」の言説が幻想的なものの領域を支えるように接近していき、小説における幻想的なものの語りと交叉するとき、そこには断片化への傾向をはらむ独特の身体が生まれるだろう。それは、獣人の身体である。

その身体は、小説における「退廃」した身体の典型である。それはまず、退化へ向かうものとして表象されると同時に、退化と進化の両極を志向する身体である。その際、その「退廃」的側面は、身体のさまざまな断片（細部）によって表現される。この後詳しく述べるように、ウェルズの小説では、そのような身体が、進化を虚焦点とするような全体的秩序の形成に決定的に関与するだろう。

ところでこの獣人の身体に関係の深そうな別の小説ジャンルとして、私たちはゴシック小説というものを知っている。J. ハルバースタムは、怪物の身体が強調されるようなゴシック小説が登場したときに、19世紀文学をある意味で先導するようなゴシック的な伝統が生まれたのだと主張している。もちろん『フランケンシュタイン』以来の怪物の身体を獣人にそのまま重ね合わせるということには十分慎重でなければならないだろう。だが獣人の身体が何らかの意味でゴシック的な身体の系譜に連なることは間違いない。なぜなら、獣人もまたある意味での怪物であるというだけでなく⁽⁴⁾、それが怪物同様、他者のなかに否定的な身体反応を引き起こすものでもあるからである。

再びハルバースタムによれば、ゴシック小説とは、「読者の内に恐怖や欲望を産み出すように企図された修辭的文体と物語構造」（Halberstam [1995:2]）である。つまりゴシック小説は、読者の身体反応を記述の作法として組み込んだ装置なのである。獣人もまた同じように、読者の内に身体反応を引き起こす。だが「退廃」のフィクションにおいては、獣人の身体は、単なる恐怖とは異なる身体反応として“嫌悪”を引き起こすように思われる。それは、恐怖とは似ていながらも、もっと直接身体的な次元に準拠しているものだと言えるだろう。言い換えれば、嫌悪は、読者を獣人と同じ幻想的物質的次元に引き込むための入り口となる。

（2）「退廃」の言説空間

こうして、「退廃」の言説が小説という言説形式と交わるとき、そこには獣人の身体と読者の身体が嫌悪という反応において結合するような言説空間が生じていると言えるだろう。で

そこに科学的観察者は、「進化」という言葉に一般に結びつけられているような、より高度かつより良い物への必然的な傾向を発見することができないということなのである。」(Wells [1891: 247])

ここには、私たちがここまで示そうとしてきた「退廃」のイメージが、巧みな比喻で語られているといってよい。そしてこれから以下で考えてみようとするのは、ウェルズが彼のSF小説と呼ばれる作品群のなかで、そのような「退廃」を基盤にした世界をどのような形で提示しているかということである。その際、上にふれた二つの物語形式が導きの糸になってくれるだろう。だがそこに向かう前に、私たちは、小説という言説形式が「退廃」の言説に交叉する場所にふれておく必要がある。

【3】「退廃」と小説

(1) 獣人と嫌悪

もちろんここで私たちは、小説という言説形式が西洋近代のなかで占めていた独自の地位について解答を与えようと言うのではない。それはきわめて射程の大きな問題であり、この小論の範囲を超えている。正確に言えば、ここで私たちが考えてみたいのは、「退廃」、つまり屈折したダーウィニズムが小説と出会う地点はどこで、そこにおいてどのような言説空間が現出するかという問題である。

そこで再び取り上げなければならないのは、すでに引用したビアーの指摘である。そのなかで彼女は、自然の超多産性が、幻想的なものの領域を支える役割を果たすということを述べていた。そこには既に触れたようにダーウィニズムがフィクションとして成立するようになる一つの道筋が示されていると言えるだろう。

だがそれは、科学としてのダーウィニズムが小説に接近していく様子を表しているのであって、そこにはまだ屈折したダーウィニズムである「退廃」の言説が、小説という記述装置と交わることによって起こることが具体的に指摘されているわけではない。では小説の側において幻想的なものの領域は、どのような意味合いを帯びたものなのだろうか？

D. ハーターは、19世紀に栄えた幻想小説が、通念とは違い、きわめて物質的な、感知しうる世界に根本的に根を張ったものであると主張する。ただしそれは、その物質的な世界を常に断片的な状態において把握しようとする。具体的には、そのような世界を構成する中心となるのは、断片的な身体である。それへの奇妙なほどのこだわりが、幻想小説の空間を規定する。ハーターにとって重要なのは、幻想小説が、ただ単に断片に惑溺し、拡散していくようなものではなく、同時期のリアリズム小説とは方向性こそ逆ではあるが、全体性を志向し

退化を起点とする点からみても、ダーウィニズムのなかに「退廃」が取り込まれたというよりも、事態はむしろ逆のように思われる。むしろそこでは「退廃」の言説によるダーウィニズムの部分利用のようなことが起こっているのである。

こうして19世紀後半の言説空間に全面的に散布されていく「退廃」の記号の形が整う。それは言ってみれば、“退化に近い何か”の記号としての「退廃」である。改めてここまでの議論をまとめれば、「退廃」はダーウィニズムとある意味でねじれた、つまりフィクションへの方向性を指し示す形で接続している。そこでは「「退廃」=退化」という図式は保持しつつ、だが進化とも退化ともつかぬ状態が、言説の当事者における「退廃」のリアリティとなる。結局全体としてみれば、退化のようなそうでないような記号が「退廃」であり、その意味で「退廃」の言説は根本的に曖昧な性格を帯びることになる。

そしてそのような「退廃」の記号が核になって物語が紡がれていくとき、一方向的な退化に比重がかかるか、それともその逆かによって二つの形式が現れるだろう。前者の場合は、全体的な方向性として退化へ向かいつつ、ただしそれは進化の逆説という形をとる。つまり過度の進化が退化につながるという構図である。それに対し、一方向的な退化にそれほど比重がかからない場合には、進化とも退化ともつかぬ状況が常態化することになる。その場合退化は局部的には起こるが、全体を一つの方向に動かしていくことはない。従って、そこでは進化と退化がさまざまな部分で同時に生じていることになる。

ここで私たちは、そうした「退廃」の物語を追求していった存在としてH.G. ウェルズの名前を挙げることができるだろう。彼の著作—特に世紀転換期に発表された一群のSF小説—がダーウィニズムの影響を抜きに語れないというのはよく指摘されることだが、私たちの議論にとって彼が重要なのは、むしろ正確には彼の描く世界が「退廃」に準拠しているようにみえるからである。例えば1891年に発表された「動物学的退行」という論文では、「退廃」の重要性が指摘されたうえで次のように言われる。

「実際、しばしばずっと上り坂の山道に例えられる生命のたどる道のりは、それよりははるかに起伏の多い田舎を気ままにそぞろ歩きする人たちが自然に切り開く小道に近い。より高度な生物学は、大衆的かつ詩的な創造物である。一つの門、あるいは子孫の系列の真の形は、大都市を動き回る多忙な人間が描く軌跡の方にはるかに近い。それは地下に潜ることもあれば、曲がりくねった通りで折り重なったり急に曲がることもある。そうかと思えばはるか頭上の高架橋にあり、またこのさまざまな場所を経巡る旅においては河川が利用されることもある。そうした系統樹のさまざまな支脈は、上へ向かうものと下へ向かうものとが絡み入り交じり、解釈することの困難な、ある決まった事物の型を描き出す。だが確かなのは、

て、種はとりあえずさまざまな変異をできるだけ多く産み出すよう促されることになる。その意味で変異とは根本的に無方向なものであり、進化にとって（結果的に）無意味な変異も無数とっていいほど生まれることになる。そのような事態をここでは“変異の任意性”と呼ぶことにしよう。

ではこの変異の任意性は、どのようにダーウィニズムを屈折させるのだろうか？

ダーウィン進化論のはらむ物語性を論じたG. ビアーは、次のように述べる。

「ダーウィンの理論は、ありあまる豊穡さや極限の多産性を強調することによって、グロテスクなものの方に手を差しのべていた。自然とは、番わせるよりも消費するものであるとみられていた。超生産性は、幻想的なものに信憑性を付与した。」(Beer [1983: 123])

ここで言われている自然の超多産性の認識が可能になるのは、その前提として変異の任意性、すなわち進化のために変異は過剰なほど生産され続けなければならない、という事態が存在するからである。しかもビアールの指摘が興味深いのは、その多産性が、きわめて過剰なものであることによって、超現実的な趣すら帯びてくるということである。そこでは、変異は思わぬ方向へと逸脱し、常識的には考えられないような“グロテスクな”個体を産み出す可能性が常にはらまれている。ダーウィニズムの世界とは、種として固定されることなくいつしか消費される変異の方がむしろ多数派である、どこに向かうかも定かでないような変異が出現と消滅を繰り返すような場所である。

もちろんそれは、現実には中間的な変種が観察されるというよりは、そのような世界観に立つとき初めて見えてくるような場所である。それゆえその世界は“幻想的なもの”であり、ここでダーウィニズムは一種のフィクションを保証する言説になる。

しかし変異の任意性は、自然の超多産性の認識を生むだけではない。さらにそれは、「退廃」という記号のリアリティを規定するようになる。

変異の任意性は、結局進化は予測不可能なものだという感覚を強調することになる。ある一つの変異が進化に向かうものなのかそれとも退化に向かうものなのかをそれ自体で判断することはできない。そしてそれは、進化論的秩序の崩壊ではなく、変異の任意性を前提にする世界においては基本的な当事者のリアリティなのである。そこでは、進化と退化は一方向的不可逆的な関係ではなく双方向的可逆的關係にあるのである。

この進化とも退化ともつかぬ状態のリアリティは、当初家系の絶滅の物語を描いていた「退廃」の言説に大きな変化をもたらすことになる。いわば一方向的な退化の物語であった「退廃」の物語は、進化と退化の境界が流動化することによって家族という閉域を超えて展開することになる。つまり、「退廃」という記号が社会空間へと分散していくのである。これは、

然状態を基準に置くことで初めて成り立つものである。つまり、進化論的に劣った者を予め理念的に固定することによって、現状の異常さが指摘されるのである。その意味でそれは、犯罪人類学の場合と同じように「退廃」=退化の図式に根本的には基づいているのである。

ところがここで注目したいのは、この図式に単純には収まらない「退廃」の様相があるように思われるという点である。それは、上で述べた“「退廃」を記号として経験する水準”という視点に直接関わってくるのだが、読者公衆が示す「退廃」に他ならない。言い換えればそれは、言説空間の当事者において経験される水準に存在する「退廃」の様態である。

M. ノルダウによる『退廃』（1892）は、そのような「退廃」の経験を示唆してくれる。この書物にはまた後で戻ってくることになるが、そこでは世紀末のさまざまな「退廃」した芸術の病理が指摘されるだけでなく、そのような芸術に過敏に反応する読者（鑑賞者）公衆の「退廃」が詳細に描き出される⁽⁹⁾。ここでの著者ノルダウの意図は、冒頭にロンブローゾへの献辞があることからわかるように、経験科学の最新の成果を芸術という対象に応用することにあった。その意味でこの書物は、本論で考えようとしている当事者の経験としての「退廃」の側に直接立ったものではない。しかしながら、このノルダウの研究の最も興味深い点は、それがそのような純科学的な意図を裏切って、「退廃」=退化という図式に収まらない経験の水準に触れてしまっているところにある。読者公衆とは、記号を想像的に経験する際の中産階級の姿に他ならず、ノルダウの記述は、中産階級自身と「退廃」との微妙な親近性を図らずも物語っているのである。

（2）ダーウィニズムの屈折

ではそのような当事者の経験としての「退廃」は、どのような構図のもとに収まるのだろうか？ 実はここでも「退廃」はダーウィニズムと無縁なわけではない。むしろ「退廃」の言説は、ダーウィニズムのある側面をことさら強調し、その側面を物語の中心にすえることによってその経験のための舞台を整えるのである。

ダーウィンが進化論の図式のなかで変異を強調したことはよく知られている。進化の過程においてある種が生き残るには、さまざまな環境に適応しうる形質を持った個体を新たに産み出していかなければならない。言い換えれば、進化における種間の優劣は、変異する能力の強さにかかっている。そして、その力の強さは、どれだけ他の種よりも量的に多くの個体を生産できるかによって決まるのである。

だがそのような進化の論理は、一面においては過剰な生産性の容認につながる。進化にとって有利になる変異した個体の生産は、あらかじめ方向づけられているわけではない。どのような変異が環境への適応にとって有意味かは、結果的にしか証明されないものである。従っ

がら、他方でその実質を屈折させた形で取り込むことを可能にするような水準はどのようなものかというところにある。その水準とは、いわば「退廃」を記号として経験する水準、すなわち人々が「退廃」の表象に出会う想像的水準である。そこにおいて「退廃」の言説は、ダーウィニズムを名目的に受け入れる一方で、実質的にはそれを屈折させることになる。そしてその屈折のなかで、進化よりはむしろ退化が独自の形象を喚起するものとして前景化し、「退廃」の言説の準拠点となるのである。ダーウィニズムが「退廃」の言説にとっての“起点”になるというのは、そういうことに他ならない。

ではそのように退化が「退廃」にとっての準拠点になるとき、ダーウィニズムはどのような形で屈折させられ、そこに取り込まれるのだろうか？

【2】退化と「退廃」

(1) 「退廃」の諸相

退化の表象が「退廃」にとっての準拠点になるということをよく示す例は、犯罪人類学における先天的犯罪者の類型だろう。その創始者であるC. ロンブローゾは、人間のなかには先天的に犯罪者への傾向を持つ者がおり、その存在は、先祖返りとして説明できるとした。つまりここでは先天的犯罪者に具現される「退廃」は、過去の祖先という、より原始的な段階への回帰として位置づけられたのである。この場合「退廃」とは進化の階段を逆行するものとしての退化に重ね合わされている。

だが退化の表象は、このように先天的な形にのみ該当するわけではない。ある種の人為性が強調される場面においても「「退廃」=退化」という図式は作用する。それは先にも少し触れた優生学の言説においてである。

それによると、文明の進歩は、あるべき生存競争の形を歪めている。言い換えれば、人為的環境—住環境からさまざまな救済政策までを含めて—の整備が進めば進むほど、本来ならば淘汰されてしまうような個体を生き延びさせてしまう。そしてさらにその状況が強化されれば、逆転現象が生まれることにもなる。環境によりよく適応する能力を持つ種が生存競争を勝ち抜くのだとすれば、文明の進歩は、自然状態では不適者であるはずの者たちを逆に最適者の地位に押し上げてしまうだろう。そこに優生学者たちは、将来への不安を感じ、極端な場合には断種などの手段を訴えていくことになる。

この二つの例は、それぞれ先天的な側面と後天的な側面という一見対立するところから出発しているが、実は「「退廃」=退化」という同じ図式を基にしていると言えるだろう。後者の場合には、その図式は直接的な形で出てくるわけではない。しかし、優生学の言説は、自

それに対し、退廃の観念の政治的・イデオロギー的意味を重視する立場が存在する。これは冒頭のグリーンスレイドの引用に関連してすでにふれたが、他には医学・精神医学のなかでの専門的言説としての退廃の言説が、どのようにイデオロギー的役割を果たしたかという観点からの研究という形をとることもある。その場合、一特にフランスを対象にした場合などにはダーウィニズムの影響はほとんど顧慮されなくなる⁽²⁾。そしてそれに対応して、この立場では退廃の観念の独自性が強調されることになる。

もちろんすべての研究がはっきりとどちらかに色分けされるわけではなく、多くの研究は、両方の立場を何らかの形で含んでいる。だが類型としてみれば、この二つの立場に分けることができるだろう。それは単純化すれば、ダーウィニズムを退廃にとっての文字通りの起点と考えるか、それともその起点としての位置を否定するか、ということである。

しかしここで重要なのは、どちらの見方が正しいかということではない。なぜならこの二つの立場は、ダーウィニズムの影響度をどの程度見積もるかという同じ暗黙の問いから出発している限りで、同じ議論の枠組みにのっているとも言えるからである。

そこで、19世紀後半の言説空間において、「退廃」とダーウィニズムの関係は、ダーウィニズムの影響の有無という観点とは少し異なるところで成立していたのではないかと想定してみよう。それは具体的には、徹底的に「退廃」の側からみること、「退廃」の言説にとってのダーウィニズムの意味を考えるということである。

(2) 「退廃」という記号の奇妙さ

改めて強調すれば、「退廃」の含意がダーウィニズムによって決定づけられたという面を否定することはできない。しかしあくまで「退廃」の言説の側からみるとき、「退廃」という記号が19世紀後半の言説編成のなかで描いた軌跡は、ダーウィニズムが及ぼした影響の圏域に接しながらも、最終的にはそこから遠ざかっていくもののように思われる。そして「退廃」の言説は、ダーウィニズムを無頓着な素振りで受け入れながら、さらにそれを独特のものに変形し活用していく。ある意味で「退廃」の言説は、ダーウィニズムを額面通り認めるとも認めないとも言わないわけで、そこに19世紀後半における「退廃」という記号の奇妙な存在感の源泉がある。つまり、「退廃」の言説は、自らにとってのダーウィニズムの意味合いを一義的には決定せず、むしろその決定を曖昧なままに放置する姿勢を積極的にとることによって、19世紀後半の言説編成における独自の厚みを獲得したように思われるのである。

これは、概念としての退廃が、ダーウィン進化論とは無関係に唱えられたという先に触れた事実とは全く別の水準にある問題である。問題の核心は、そのような科学史的側面にあるのではなく、「退廃」の言説がダーウィニズムを自らの名目的な“起点”として一方で認めな

ではなく、もっと別のところから来るのではないか、というのがここでの議論の出発点である。そしてその感じが具体的にどのようなところに根ざし、どのような様態のものであるかをここではH.G. ウェルズの著作を素材にみていきたい。だがその検討に入る前に、もう少し議論の足場を固めておこう。

【1】“起点”としてのダーウィニズム

(1) 「退廃」とダーウィニズム

実は冒頭の引用には、もう一つ注目すべき部分がある。それは、退廃とは「ダーウィニズム以降」のものであるという考え方である。そこでは退廃とはダーウィン進化論と結びついたものであることが暗黙の前提になっている。

だが、退廃には単に進化論のなかの一概念と言い切れない面がある。例えば、科学史的事実として、退廃という概念は、ダーウィニズムとは独立に唱えられたものである。退廃という概念の直接の提唱者とされるのは、フランスの精神科医B.A. モレルである。彼は1857年の『退廃論』のなかで、「起源の型から離れた者」という言い方で退廃を規定し、退廃者の家系は、四代のうちにさまざまな病理を発現しながら最終的に滅びるとした。つまり退廃という概念は、ダーウィンの『種の起原』(1859)とほぼ同時期ではあるが、それとは別個の歴史の出発点を持っているのである。

だがもう一方で、ダーウィニズムの登場が、「退廃」が流布していくうえで決定的な役割を果たしたということも事実である。それは、1880年に出版され大きな反響を呼んだというランクスターの著作が“Degeneration: A Chapter in Darwinism”つまり『退廃、ダーウィニズムにおける一章』という表題を持ったものだったということからもうかがえる。19世紀後半の西洋の言説編成において、実際退廃とダーウィニズムの結びつきは、退化という概念を介して必然のものとして理解されていただろう。

では「退廃」とダーウィニズムの関係は、厳密にはどのようなものだったのだろうか？

退廃をテーマにした研究はすでにかなり蓄積されてきているが、そこではその関係についての立場は二つに大別されるように思われる。

まず退廃を「ダーウィニズムの衝撃」の一部として扱う立場が存在する。これは、進化論の直接の影響として退廃論の隆盛を説明するものである。例えば、進化論が進歩観に影響を及ぼし、そこから貧困層を淘汰されるべきものとみるいわゆる優生思想が派生したとするような説明の仕方がその一例である。この立場によれば、退廃は進化論の影響の結果生まれる一つのエピソードとして、脇役的に扱われる傾向が強い。

退廃・獣人・嫌悪

—H.G.ウェルズを通して見た言説の近代—

太 田 省 一

【0】はじめに

「退廃 degeneration の観念は、ダーウィニズム以降の世界にとって重要な神話の源泉だった。ヴィクトリア朝後期の体制側の人々や財産家階級は概して、貧困や犯罪、公衆衛生や国家的帝國的観点からみた体格の問題、退嬰的な芸術家、「新しい女性」や同性愛者、といったものに不安の念を抱いていた。この「退廃主義」とでも括ることのできる緩やかな信憑の集合体は、特に経験科学の帰結として認められたときには、制御不能で困惑を引き起こすような現実的存在のエネルギーに対する罪悪感、そして恐怖心を置換し転移してくれるものになった。」(Greenslade [1994: 1-2])

「退廃」は、19世紀後半の西洋において最も流行した表現の一つであり、それは医学、生物学、社会学、文学から政治の世界に至るまで領域横断的に流布していた⁽¹⁾。言ってみればそれは、あらゆる“病理”—個人的なものから集合的なもの、あるいは双方に関わるものまで—の解釈を可能にする記号として定着していたのである。だがこの「退廃」という考え方は、なぜそれほどまで広まったのだろうか？

その問いに対する代表的な答え方は、上の引用でグリーンスレイドが示しているようなものである。つまりそれは、「退廃」という考え方が、「体制側の人々や財産家階級」—ここではまとめてそれを中産階級と呼ぼう—が抱く、さまざまな形で自分たちの秩序を脅かすものに対する不安を、学問的な説明という一見客観的な形式で鎮めてくれる効用を持っていたからだ、というわけである。言い換えれば、「退廃」とは、中産階級の文化的社会的利害を正当化するイデオロギーだったというわけである。

だがこの小論で考えてみたいのは、この答えでは十分に語りつくせない「退廃」の側面についてである。「退廃」という記号は、19世紀後半の西洋の言説空間において独特の位置を占めていたように思われる。その存在感は、イデオロギーとしての役割から醸し出されるもの